

直方ミニバスケットボールクラブだより

2023年度最終号 2023年度6年生卒部

ミニバス

共育コラム

また新たな15個の結び目が・・・

大会終了後、最後のメッセージ。「入部を決意して、今日までやり抜いて卒部の日を迎えたことが、何よりも価値あること」と伝えました。「この日、ここに集っていることは、自分で結び目をつくることができたということ。6年生のチームメイトと、後輩と、監督・コーチと、そしてクラブとの結び目、自分の中に生涯にわたって残り続ける宝物になっていると思う」と。これまでのOBがずっとつながり続けているのと同様、卒部生として、先輩として、時に体育館にもどってきて後輩の練習相手になってくれたり、アドバイスを送ってくれたりしながら、またさらなるつながりを育み続けてくれればと思います。

今大会にも、成人したOB、大学生、高校生、中学生と、それぞれの成長段階にあるOBが姿を見せ、後輩の応援をしてくれていました。小学生のクラブチームは、地域の宝物として位置づけることが望ましいと思っています。OBをはじめ地域の人たちに声をかけてもらえる、応援してもらえる、そんなクラブとして存在することが大事だと思っています。現に、毎日入れ替わりで19時から体育館を使用しているさまざまな団体の人たちや学童の職員のみなさんから、よく声をかけていただいています。子どもたちもちゃんとあいさつをしています。このような関係性が、持続可能なクラブチームとして存在し続ける支えになります。

私自身は小学生のクラブチームに携わって43年を終え、44年目がスタートします。これまで長きにわたり多くの卒部生を送り出してきました。今日の前にいる子どもたちにとっては、バスケットが大きなウエイトを占めているでしょうが、いずれその比重は変化してきます。バスケットとの距離感が変化してきます。そのとき自ら自分の進路を見定め、新たな分野に進み、なんとか職に就いて生計を立て自立して生活をおくっていきます。どの道を選んでも、必ず輝ける時期と地道な努力が求められる時期があります。輝きは時期の違いだけで、どの子にも訪れます。いずれの道を選ぶかは、最終的には本人の意志と決断を尊重することが重要だと思います。

そんななか、出会った多くの子どもたちが、進む道は違っても、自分の趣味や子育てなどで、なんとかバスケットを身近なところに置いて楽しんでいるようで、それがとてもうれしいです。そして、当時のメンバーや前後のメンバー、さらには、他のチームのバスケットなかまと、つながりを拓けていることもあります。私のところから離れた後の成長の過程であった喜びや苦労話、苦難を乗り越えて今があることなど、いろいろな話を聴かせてくれます。そんなことを話せるつながりが今なおあることで、私もエネルギーをもらっています。子どもにとっても私たちおとなにとっても、生涯にわたって力になっているもの、その大切な要素に、“つながり”があるということをいつも感じています。

変化の時代だからこそ・・・

今回、チームの関係者からクラブ運営の難しさやチームづくりに関する苦労話を多く聞きました。子どもどうしの関係、保護者どうしの関係、子どもとの関係、保護者との関係等、幾重にも調整を図りながら活動を続けることの大変さが主なものです。私たち指導者の指導の在り方の問題もあるでしょう。三者が合意形成を図り、信頼関係を育みながら活動をつくっていくことが重要です。

今は、中学生対象のクラブも設立されるようになってきています。中学校の部活とクラブチームの関係も、小学生にとってのクラブの在り方も、いろいろなところで取りざたされています。今、子どもたちの教育（スポーツ活動）をとりまく状況は変化のときです。学校教育と社会教育、その変化に公的機関は、いまだ積極的な関与はなく、ほぼ現場任せの状況で、おのが向き向きの形で活動が進められています。確かな制度やシステムが確立されないまま、ルールも流動化しているなかで、現場は模索を続けています。選択肢は増えつつありますが、その分選択・判断は難しく悩ましいですね。

いずれを選択・判断するか、それは、最終的には子ども自身であるべきですが、子どもにとっては、情報量も乏しく、情報の質も浅いなかで、なかなか正確・精密な情報をもとに判断することは難しいですね。そこで、おとなのアドバイスが必要になります。とりわけ、子どもが最も信頼をよせる保護者からの情報は重要な判断材料になります。それだけに、おとなの、保護者の情報とうけとめは重要で、その出し方によって、子どもの選択が決定づけられることになります。おとなになったとき、その子の心体に何が残っているかが大事ですね。変化の時代に、いつ、何を選択するか、自己選択・自己判断が求められる時代です。

